

## 令和5年度 中野市総合教育会議 会議録

- 1 日 時： 令和6年1月30日(火) 午後2時00分～午後2時56分
- 2 場 所： 中野市役所5階 会議室52
- 3 出席者： 市長 湯本隆英  
教育長 柴本 豊 教育長職務代理者 永江文樹  
教育委員 小野良一、武田美穂、齋藤文子  
副市長 竹内敏昭 総務部長 栗林淳一  
教育次長 柴本清天 学校教育課長 小橋俊樹  
総務係長 鈴木洋二 学校教育係長 芋川文実  
指導主事 有賀 透、和田恒弥 総務係副主幹 池田真理子
- 4 傍聴者： 4名（うち報道関係3名）
- 5 会議事項： 進行 湯本市長

不登校児童・生徒への支援について（資料により学校教育課長が説明）

湯本市長：ただいま説明がありましたが、本日お集まりの教育委員の皆様からご意見ご質問などお願いしたいと思います。

永江代理：最初に説明がありましたが、令和になってコロナ禍で不登校が増えた。中学校を卒業して高校に行っても、そこで中退して、ひきこもりとなると誰が対応するのか。親しかいない。家が回らなくなる。市全体でカバーし、今のうちに何とかしなければというのはわかる。どこから手を付けるか。人員とお金の手当が必要。ただ、誰でもいいというわけにいかない。早め早めに適応できる人を探しておかないといけない。非常に大変なことだ。

湯本市長：今、永江委員さんからお話いただきましたが、お金、人員ですね。それらにつきまして、また、ご意見、ご質問等含めて、ご発言願いたいと思います。

小野委員：今、事務局の方から説明がありましたように、市としても学校としても、今思いつく、或いは持っている力でできる、その対応・対策を一生懸命やっているということは、私も承知しています。私は南宮中学校のコミュニティスクール運営委員会の委員をやっていますが、南宮中学校で

も、非常にそのことを課題として受けとめ、校長先生自身、1人も見捨てないというような固い決意のもとに、かなりいろいろな取組みをされています。スクリーニング会議をしたり、或いは朝、生徒が来ている、来ていない、どこにいるかという所在の在り方も、ホワイトボードで全職員がわかるように工夫されたり、授業改善して、何とか楽しい授業で子どもたちが魅力を感じる、そういう学校にしていきたいとか、様々な所で努力をされています。しかし、実際に現状をお聞きすると、10月の時点では、登校を前向きに捉えられるようになった生徒がいる半面、新たに不登校になりそうな生徒がいて、いわゆる一進一退の状態、数としては、全然現状変わってないように見えてしまうので、それを一体どういうところに原因があるのかということを実際に今考え、手を考えようとされています。学校に来られるようになったお子さんの、きっかけになったことを調べていくと、今年度は通級指導教室が増えて2つになって、去年1人で20人ぐらい見ていたところ、2人で25人という状況になって、指導の余裕が出た分、登校支援コーディネーターをお願いし、大分教室に入れなかった生徒への対応ができるようになった。或いは今話題に出てきている「日なた」という、「ぱーむぼいす」さんがやっている施設ですが、最初3人の希望だったのが、今はもう30人を超えるぐらい。希望があれば、送り迎えをしてくれるし、無料でできるので、それがきっかけになって学校へ来られるようになった生徒もいる。出て来られるようになった生徒というのは、それなりにきっかけがあって、打った手が有効に作用している。だから、そういうプラスになったところをもう1回見つめ直していくと共に、今度逆に学校へ来られなくなってしまうのが、これ一体何が原因なのか、先ほど事務局の説明では、本人に係る状況である無気力とか、そういうのが原因であって、調査の上ではそういうふうに出ているんですが、或いは、いつかのニュースでは、家庭に問題があることが大々的に報道され誤解を招いたという例もある。ただ、私に言わせると、不登校になった原因というのは一概にわからない、本人でさえもわからないということが多く、いろいろなことが複合的に重なっている例が多いと思うんです。だから、その所は、こちらが予想することしかできないんですが、南宮中学校の校長先生は、コロナで大分友達同士で話をする機会が減って、給食も黙って食べるというような状況があったり、オンライン授業の形になったり、いろいろなことが重なってきていて、友達と接触する楽しさみたいなものがなくなったのも1つの原因かなというふうに言われていました。それから、もう1つは学校へ行かなくてもいいというか、世の中の考え方が変わってきて、学校へ行かなくても、その子なりの学びの姿があるので、先ほどから上がっているフリースクールとか、或いは夜間中学なんて話まで出るぐらいで、どこで学んでも、どんなペースで学んでもいいということも言われてきているので、それでいいのかというふうに考えるお子さんや親御さんもいらっしゃるんじゃないかということも言われていました。だから

ら、原因はそんなことで様々予想されるわけですが、このまま学校へ行かなくても、オンライン授業なり、通信の授業なりで知識は得られると思います。それから、いろんな受け入れてくれる高校がありますから高校へも行けると思います。けれども、果たして長続きするかどうか。それから、社会人になって、会社勤めをしたり、社会生活をするようになって、対人関係がやはり磨かれていないと、或いは、付き合いの楽しさみたいなものも味わっていないと、なかなか難しいかなというふうなことを考えると、何とかして学校教育に戻してあげたいと私は考えています。いろんな意見ありますけれども、何とかして1人でも多く1日でも早く学校へ近づけるようにしていきたいなと考えているんですが、いろいろ先ほど申し上げたように、いっぱいやっているにもかかわらず、なかなか効果が上がらないのはなぜなのか。そこで、見直してみる必要があると思うんですが、先ほど言ったように効果を上げている例というのを、いくつか県の資料にもいっぱい挙げてもらってあるし、いろんな市内の学校の中でも効果を上げている通級指導教室とかありますので、そういったところをやはり情報交換して見習って、そういう事例を増やす。そして、それについてやはり支援をしていく。市としても効果ありそうところへ力を入れていく。それから逆に、やっているけど上手く機能していないということで、先ほど中間教室のお話がありましたが、中間教室の先生を教育委員会付けにして、より動いていただくという方向は私もいいなと思ったのですが、そんなふうには今ある施設だとか、或いは今配置している支援員さんだとか、教育指導主事の分担だとか、いろんなことを教育委員会としても見直しをしたいということで、今やっているけれどもなかなか効果が上がってきてないことについては見直しをしながら、先ほどの効果を上げている部分にウエイトを置けるように、人もお金も回していくような形を粘り強くとっていか解決の方法はないのかなと思います。いっぱい来年度の目標も書かれていますし、効果が上がってくるように、我々も定例の教育委員会で話題にしながら、応援できるところは応援をしていきたいなと思っています。先ほどお話した南宮中学校、この間、コミュニティスクール運営委員会で聞かせていただいたんですが、こんなお話をされていまして。今年から2クラスに増やしていただいた通級指導教室が、最初25人だったんだが、来年は50人になりそうだ。それを2人で見るということになると、1人25人持たなければいけないということで、これはもうとても限界、登校支援コーディネーターの仕事ができないので、また元に戻っちゃうっていうようなことで心配をされておられました。教育長も県へ要望してくださっているそうですけれども、県の方も、あっちでもこっちでもっていうことで、お金が都合できない場合は、ぜひ何とか市の方で1人確保できるように考えていただければいいなというようなことを、校長先生ともそんな話をしてきました。いずれにしろ、多くのことをやっていくしかありませんので、努力をしていきたいなと思います。最後に校長先生ともお話したの

は、やはり学校が楽しくななきゃ駄目だよなっていうことが最終的な結論で、そのためにやはり学校が努力し、授業を面白くしたり、クラス作りを頑張ったり、或いは盛り上がるイベントなんかを大事にしようって。もう1つは、南宮中学校は、挨拶と掃除と歌声を大事にしています。挨拶を大事にしていたり、掃除を大事にしている学校が、実は中野市結構多いと思います。それは何かというと、毎日の積み重ねの中で、学校に行きたくなくても頑張っていく力とか、或いは友達と関わりあって、揉まれながら伸びていく力とかいろんな力が、そういう地道な活動の中で育っていくのになって、だから、こっちの方も大事にこれからもしていかなければいけないということをつくづく感じています。

武田委員：最近まで小・中学校に子供が通っていました。思うところは、コロナの前と後でとか今もちょっと増えてきておりますけれども、その前後で大分世の中もそうですけれども、学校に対する意識というのも感じ方も変わってきたのかなと思います。というのは、その前だと絶対に義務教育だから学校に行かなければいけないっていうことで、でもいけないような感じで、行けるようになったとしても、実際にその子供がコロナになってしまって、その後の後遺症でちょっと無気力になってしまったということで、行かれなくなっている子も実際見えています。以前と比べると、不登校だからいけないということではなく、行かなくても他の道がある、今挙げたような道があるというような、学校以外の多様化、いろいろな所が言っているような環境にはなってきている。それで、子供の周りの例で言うと、やはり、不登校になる原因というのは本当に様々あって、例えば友達から言われた一言が原因で来られなくなってしまった子が、そのままずっと行かれなくなったというのもありますし、グループ分けをしたときに、グループから漏れてしまって、何となく学校に行きにくくなってしまったというのもあります。1回休んでしまうと、なかなか学校に行こうという気持ち、とても気持ちを上げないと学校に行くのが行きにくいのかなとは思いますが、本当は行こうと思っていて、明日は行こうって思っている、だんだん先延ばしになって結局何ヶ月も何ヶ月もってなると、今更行っても勉強もついていけないし、友達もどうせ僕のことなんかという感じで、そのまま不登校が続くという例もあるのかなと思います。高校とかになったときに、結局普通高校には行けずに、通信教育だとかそういう所を選んだというのも実際見えています。学校教育とかその集団の大切さって本当に大事だと思っていて、小学校の頃に集団で学んだことって、大人に今になってから生きているなっていうのがありますし、小野先生がおっしゃられていたように、社会に出てから、やはり小さい頃にいろいろと集団で学んだことをしていないと、例えばせつかく仕事に就いても、実際最近うちの職場でも3日でやめたっていう若者もいましたので、ちょっと気持ちが強

くなれない、子どもがそういうふうになってしまうのかなと思います。私自身がどうこうというのは、なかなか難しくてできないですが、中野市の方で入れていただいたコーディネーターであったり、そういうことを軸にしながら、自分でも微力ではありますが、協力していければなと考えております。

齋藤委員：今のお話聞いていたんですけれども、学校に行かれなくなった小学生は、本人とか家庭の事情とかって言いますが、ヤングケアラーの子もいるかもしれないし、そういう実態がどうなっているかということも、市としても把握していると思うんです。中野市も学校との連携で、その家庭との連携が密になるように、いろんな支援がありますよということを、学校に行かれなくなった保護者に、連絡を通してやっているはずですが、知り合いとかで、不登校の子がいるんですけれども、不登校になったとき、もう長期間不登校になると、何で行かれなくなったのか、自分でもわからない。なので、もう早め早めに手を打つ形にしてもらおう。あと、中間教室に行く、家から出る、「日なた」みたい所に行く、うちの周りでもいいから家から1歩出るといえることができるような環境を持ってもらえれば一番ありがたいんです。あと学校や保護者が仕事している場合、明日は行こうねって約束はするけれども、朝なんて起きてこない。そうすると、自分は仕事に行かなきゃいけない、でも給食のために行こうかなとか本人は思っても送迎ができない。そういうときに、親としてはすごくせつないので仕事を辞めなきゃいけないかなとか、そういう悩んでいる保護者の方もいらっしゃいました。本人も辛い、親も辛いかもしれないけど、それを1人で抱え込まないで、こういういろんな相談する場所がありますよとか、情報というか、それを市と連携を取ってもらって、「1人で悩まないでみんなで共有しましょう。1人じゃないですよ、見捨てたわけじゃないですよ」という感じの声かけとか、そういうのがすごく本人には心が和むというか、そういうのは大事だなと思うんですよね。それは地域としてもやってもらえれば本当に、ただおはようとか、そういう形でも声かけてもいいので、そういうのが地域としてやってもらえればありがたいかなと思います。いつ行くかわからないので、給食も止めないでそのまま給食費払っているんだっていう保護者の方もいたので、どうしたらいいかななんて言って悩んでいる保護者の方もいらっしゃって、週末に学校から来るお便りですけど、学校へ取りに来てくださいと言われるときもあるんですって。そうすると、保護者が行かないと子供は行かない。一緒に行って、学校の雰囲気はこうだよとか、下校の後でもいいんですけど、行って先生とか、支援の先生とちょっと会って、コミュニケーションとるのも大事だよって言うんですけど、それも行かれないうときもあるんですというように話を聞いたことがあるので、それなら支援員と担任と中野市とみんな

なが協力し合う、みんなで見えあげられるっていうような、そういう取り組みをしていますということを、悩んでいる保護者の方とか、本人にも伝えてあげたいなと思います。

湯本市長：斎藤委員さんが今おっしゃっていた繋がりの中では、自分たちがやっているつもりだけど本人までそれが届かない。そういうものに対しては、事務局として改善する余地はありますか。

学校教育課長：今までもできるだけそういったことがないように、密にそれぞれ関係のところと連絡連携を取りながら進めてきているところですが、新年度さらに学校教育課の窓口には教育相談コーディネーター、学校だけでなく市役所の方にも直接の相談窓口があるんですという、市役所、ちょっと敷居が高い印象あるかもしれませんが、学校だけではない相談窓口、また、不登校児童・生徒支援員が相談を受けたところで、学校それから家庭、関係機関をつなぐ役目、機動性を持って、それぞれに対応できればというところで、さらにきめ細かに対応できるような体制をとればというふうに考えているところでございます。

湯本市長：待ちの姿勢だけじゃなく、そういう話になったら、こちら側から相手側へ逆に出向いてってお話を聞くという姿勢が今後大事ですね。

柴本教育長：今、学校現場の現状につきましてはそれぞれの方からお話いただいたとおりでございまして、私は教育委員会としてどうしたらいいのか申し上げたいと思うんですけれども、私が思うに教育はもうあくまで人だというふうに思っております。その人を入れるためにはお金もかかってくる。そういった中で、先ほども開会の挨拶で申し上げましたが、大変市長はじめ、関係者の皆さんに教育行政のご理解をいただきまして、教育支援員につきましては、大変ご配慮いただきまして、学校からの要望は何とか対応させていただき、本当にありがたく思っております、感謝を申し上げます。私ども教育委員会といたしましては、やはり主役は子供であるということを前提に、今、それぞれやっただけでございまして、今回お配りいたしました資料1にありますとおり、ここに学校教育課という、市役所の教育委員会の下の名前、幾つか出てきます。今までは全て校長先生のもとで学校が動いていて、私共もそこから何か相談をいただければ、教育委員会はまた手だてができた。そこに指導主事の先生方が積極的に学校に入っただけでございまして、主要な情報というか、何か情報は全て教育委員会の方には上がってきておりました。ですけれども今回は教育委員会と学校、これ何か、不適切な言い方かもしれませんが、縦系列の繋がりかもしれないんですが、そうではなくて、横にしたいなと思っております。それで、学校教育課がそういった窓口になることによって、例

えば、今お話にあった学校には行けないから学校に相談に行けないけれども、市役所だったらいけるといような人が出るかもしれないんです。そういった中で、この教育相談コーディネーター、これにつきましては、令和6年度、教育委員会としては一番力入れたいなと思っております、窓口になることによって、教育委員会、学校で持っている情報、それからまた不登校のお子さんたちというのは、子ども部子ども相談室でもかなり情報を持っているんです。場合によっては、福祉課でも持っている場合があります。関係部署との連携、それと先ほどあった「ぱーむぼいす」ですとか、外部機関団体との横串の働きを、教育相談コーディネーターに務めていただきたいというように思っております。不登校児童・生徒の多様な学びの場、学校だけが学びの場ではないですから、今の教育は。そういった中で、そういう学びの場合への行きやすさですとか、そういった支援ですとか、悩みごとの相談ですとか、学校に行けない人たちも自分で自己肯定感が生まれるような支援を、教育委員会も一緒になって現場とやっていきたいというのが、この今回の資料1の内容でございます。やって上手いかない場合もあるかもしれませんが、こればかりは相手が人なものですから、どうなるかわかりません。ですから、やりながら直すところは直す、そんなようなことをしながら、とにかく子供たちに学校に信用される教育委員会でありたいなというふうに考えておるところでございます。

湯本市長：さきほど小野委員からもありましたが、原因はいろいろあって、複合化、または多層的に、こういろんな不登校のお子さん方がいらっしゃるとい中で、今教育長からもお話ございました、今までどちらかという縦型の組織をなるべく水平型に変えて、横の連携を深めながら対処していく。あとは相談しながら、1つ1つ時間がかかるかもしれませんが解決していくというような方向でということだと思いますよ。

永江代理：横の繋がりは私も前からずっと思っているのですが、いいことじゃないかなと思います。不登校の子は、特に中学に行って、小学校と中学校でギャップがあつて、不登校になってしまうんだらうと思うんですけども、そのぐらいの子供たちは、親が忙しい中、お前どうしたんだって言っても、本当のことはしゃべりません。思春期の子どもは絶対にしゃべらない。かといって親は付きっきりで聞いているわけじゃない。支援員の方々が、こまめに、先ほど小野委員が言ったように1人で20何人は見られません。それで、そばにずっといて、しゃべらなくてもいいから一緒にいたり、寄り添ったり、これが最初の一步かな。そのうちに慣れてくると、今日給食はおいしかったとか何とかそういうざっくばらんな、いろんなことをしゃべって相談してくれるといいなと思う。人手がないが、このままにしておくと、もっと増えちゃう。その前に何とか対策をうたなければいけない。

湯本市長：感覚的にですね、さっき教育長が今後の取組みの中で話しているんですが、登校支援コーディネーター、スクールソーシャルワーカー、教育委員会から学校に向けてという形の中では、永江代理さんおっしゃっている、先ほど小野委員からもありましたけど、通級の人数が50人ぐらいという先ほどお話されていますけど、今やろうとしているその改善策ではまだ人員がちょっと足りないんじゃないかなという感じですかね。

柴本教育長：これは1人でも多ければいいです。ただ、今、子供の数は減ってきているんですが、教育の多様化といいますか、そういった部分からすると、教育現場の教員の皆さんが抱える課題も多くなってきておりまして、やはり人は多いにこしたことはないんです。ただ、今、資料の方でもありますとおり、教員不足とされております。その辺がちょっと悩ましいところですが、例えばお金があっても人がいない。そういう部分があるので、先ほど申し上げた教育支援員の先生方というのは、この地域にいらっしゃる方々を、校長先生方が一生懸命探してくださってきた先生方ですね。今回、市長のご理解をいただきまして、何とか確保いただいたんですが、本来であれば、もうちょっと欲しい。県の方で人を出していただくと、すごく現場は助かります。ただこれは今後、県も同じように財政難でもありますし、国からの補助が減ってきているというふうに聞いておりますから、そういった意味ではなかなか厳しいのかなと、どういうふうにやっていけばいいのかと考えたときに、先生方にお任せしているだけでは駄目なんだ。教育委員会の方でもできることがないのかということから、この不登校支援、ここに教育相談コーディネーター、今の指導主事の先生をこの肩書にしてやらせていただきたいと。可能であれば、子ども相談室の担当者たちも併任発令をかけていただくと一緒に入れるかなと。その分子ども部は大変ですから、なかなかその辺は私どもの思いだけではいかない部分もあるのかもしれませんが、情報の共有というのは、とにかく連携を密にしていけないといけないですから、そんなような中で、うまく回すためにはどうしたらいいか、そして今回、コーディネーターがもっと深く入って、さらに、そこに配置する職員の方々、いろいろな目で見られますから、また改善すべきところ、先生方にこちらからお願いすること、先生方からお願いされることもあるかもしれませんが、そういうところはとにかく風通しよくというように考えています。

永江代理：人員の話だけれども、支援員の先生方は市で採用してお願いしているが、やはり県にお願いできることは、できるだけやってもらいたいと思うんです。県がもう少し対応をしていただければというふうに思います。

湯本市長：それについてはまた課題としておきます。

齋藤委員：横との繋がり、いろんな分野で市の中にもいらっしゃるので、そういう専門的なことから、横の繋がりですべてで共有できる、そういうような場所を設けてもらって、学校だけで悩まないで、市に相談する、いろんな所の場所を利用してもらって、とにかく1人で悩まない。子どもも1人じゃないよっていうところを、ちゃんと見ていただくようお願いしたいと思います。

武田委員：人員が足りないというのもそうですが、不登校の子が増えている中で、子どもたちからしてみると、学校へは行きたくない、でも、社会から見捨てられたくないという気持ちは絶対あるはずなんですね。なので、僕が家にいて一人でやっているのに、誰も僕のこと全然構ってくれないじゃないですけど、そういう見捨てないということ、とても大事だと思います。人が足りなくても、絶対君のことは見捨てないんだよという、外からの支援というのはとても大事だと思います。数が増えていったとしても、私たちが頑張って、少しでも不登校が減るように働きかけていければと思います。

小野委員：これから様々なことをしていこうとしているわけですがけれども、1つ心配しているのは、今働き方改革と言われている、そうすると昔みたいに、担任の先生が毎日家庭訪問して、「おおい元気か」なんて声かけるなんてことは、おそらく不可能だと思うんですよね。そうすると、気にはなっても一人一人に対応する、その時間とか人とか、そういったものが果たして絵に書いた餅のようにならないかどうか、会議ももちろん有効だと思うので、連携をとることも大事なので、それは大事なんだけど、年間4回やっていた会議が5回になるというふうに会議の数が増えるということは、先ほどの働き方改革とも関係しますけれども、先生はやることいっぱいあるので、それとのせめぎ合いで、不登校は何とかしたいんだけど、他にもやらなきゃいけないことあるという現場の悩みについても、教育委員会は聞きながら進めていかなければいけないのかなということを感じています。

湯本市長：今皆さんからお話を聴きました。教育委員の皆さんから他にご意見はよろしいですか。ございませんので、「不登校児童・生徒への支援について」は以上といたします。